

編集後記

2022年度『広島国際大学基盤教育センター紀要』第七号を上梓する。執筆者、査読者各位のご尽力により、順調に最終原稿が集まり、ページ数も早々に確定、学内稟議手続きもスムーズに進行し、年明けすぐに校正作業開始という段取りとなった。この編集後記も2022年も残すところわずかといい、大晦日ももうすぐ、年末最終週の半ばに書いている。前号の編集後記を書いたのが本年1月、編集作業が一月ほど早まったということになる。あらためて関係各位のご協力に感謝したい。前号の最終稿提出、校正作業が始まった直後にロシアのウクライナ侵攻（プーチン大統領によるウクライナ東部ドンバス地方における「ドネツク人民共和国」・「ルガンスク人民共和国」の一方的な独立承認、同地方における軍事行動開始）が始まり、2022年末現在なおロシア軍とウクライナ軍との戦闘が継続している。

国家独立の承認という形式を経た上でのロシア軍派遣というプーチン大統領の手法は、国際人道法を念頭に置いたものと思われるが、傀儡国家の樹立による侵略の正当化という歴史上繰返されてきた手法に過ぎないのではないかと、そのような一方的な正当化の論理が国際正義の観点から認められるものかどうか。また、どのような名目、正当化の論理が行使されようとも、武力紛争の状態に突入していることは明らかであり、指導者から前線の兵士にいたる紛争当事者は常に民間人の被害発生を防止する義務を負い、民間人に被害が及んだ場合、戦争犯罪の疑義が生じるという自明でなければならない常識をあらためて確認しなければならない。

国連常任理事国による直接の武力行使という、国際秩序を根底から揺るがす事態に世情が騒然とする中、わが国では夏の第26回参議院通常選挙があった。選挙期間のさなか、7月10日の投票日を二日後にひかえた8日、奈良市内で選挙遊説中の安倍晋三元首相が銃撃を受け死亡するという憲政史上の大事件が発生した。旧統一教会によって家族が崩壊に追い込まれたとする犯人がその復讐を目的に、旧統一教会と近い関係にあるとみなした安倍元首相を手製の銃で撃ったという事件。選挙期間という国民と政治家とが親しく交流する機会を暴力で蹂躪した犯人に憤りを禁じ得ない。12月末現在、犯人の鑑定留置が継続、刑事事件における責任能力の有無を判断するための精神鑑定がなされているが(当初、鑑定留置期間が11月29日までのところ、11月17日に奈良地検が2月6日までの延長を決定、翌11月18日に弁護団からの準抗告があり、期間は1月10日まで短縮、12月11日に再び検察により1月23日までの延長がなされるも12月20日に弁護団の準抗告があり延長取り消し、鑑定留置期間は1月10日までとなった。)、年明けには裁判が開始されることとなろう。尋常な手続きによる司法の裁きを期待したい。

暴力は自身がその標的にされるかもしれないという恐怖によって、自由な言論を委縮させ、「沈黙の連鎖」をもたらし、未来の可能性を閉ざす。内外の暴力事案発生による言論空間の委縮に危惧を感じた折柄、11月29日には東京都立大学教授で活発な言論活動を展開している社会学者、宮台真司氏が都立大南大沢キャンパス内で襲撃され、重傷を負うという事件が発生した。解放性と自由とが尊重されなければならない大学キャンパスで、寸鉄を帯びておらぬという意味で無防備な人間を背

後から刃物で襲うという卑劣な事件、年末時点でいまだ犯人の検挙に至っていないが、我が国の治安と言論の自由に対する挑戦であり、何よりも犯人の早期逮捕、背後関係の有無と動機の解明がなされなければならない。重傷を負った宮台氏は12月7日に退院、言論活動を再開している。氏の健勝を祈念するとともに犯人の卑劣さ、その態様が多角的に明らかにされることを願う。

2022年、国内外において安全、安心が脅かされ、暗い時代の幕開けを連想させる出来事が続いたが、いたずらに悲観主義に流されることなく、「諦める」の本来の意味において、事態の詳細を多角的に明らかにし、多様な観点、立場からさまざまな議論を展開、明るい可能性を見出し、その実現を図ることを目指さなければならないと思う。そのためには、月並みではあるがやはり「自由な言論・討論」が必要である。戦争がもたらす悲惨の前に言論の無力を感じるが、歴史を顧みて戦争の継続は人命と国力とを削り取り、その主体である国家を衰退せしめる愚かな営みであること、当事者がもっとも身に染みているはず。事態收拾の可能性を見出すためにこそ自由な言論・討論が必要であるという主張に紛争当事者の同意を求めるといのは楽観的に過ぎるか。

風呂敷を広げたが、自由な言論の営み、その一環として本紀要第七号が恙なく刊行に至ったことを喜びたい。一点、お詫びしたいことがあります。昨年4本の論説に対し、今回は10本の論説が集まり、投稿数倍増、しかも原稿の集まりも順調と編集者としてひそかに浮かれていたのが、好事魔多しなどといった責任の所在が不明な事態ではなく、初歩的以前の、責任者明々白々（私）のミスをしてかした。稟議起案時に前号の仕様書を流用するのはいいとして、6号から7号へと号数のみ変更、論説10本と記載すべきところ、論説4本という前号の記載をそのままに提出してしまった。浮かれうっかりのミスに気付いたのがつい先日、正直に言うしかないので関係各位にミスを申告、年末慌ただしい時期、事態の收拾に尽力いただいた。ご迷惑をかけた関係各位にあらためてお詫びと感謝を申し上げたい。すみませんでした。

いろいろありましたが2023年が明るい年となることを祈って、編集後記の結びとします。

村上智章 基盤教育センター紀要編集委員長